論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（教育学）	氏名	趙　墨
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

言語学習におけるインプット情報の役割

－日本語を母語および第二言語とする子どもの格助詞学習に着眼して－

論文審査担当者

主　　査　教授　畑佐　由紀子

審査委員　教授　白川　博之

審査委員　教授　中條　和光

審査委員　教授　酒井　弘　（早稲田大学理工学術院）

〔論文審査の要旨〕

本論文では，日本語を母語とする子どもと第二言語とする子どもがどのようにして他動詞文中で目的語を標示する格助詞を学習していくのかについて実験的に検討した。

子どもの言語学習について検討した先行研究では，インプット情報の量や出現頻度が語の学習に影響を与えることが報告されている。しかし，主な研究の対象となっているのは内容語であり，格助詞のように文と文の文法関係を示す機能語については充分に検討されていない。また，第二言語を学習する子どもは，母語学習では見られない独自の文法規則を構築することが報告されているが，日本語の格助詞学習においても独自の規則が形成されるかどうかについては未検討である。加えて，第二言語を学習する子どもを対象とした日本語の格助詞学習を実証的に検討した研究はなされていない。

そこで，本論文では，日本語を母語あるいは第二言語として学習する子どもを対象に，目的語を標示する格助詞の学習にインプット情報がどのような影響を与えるかについて検討した。具体的には，項が揃ったインプット情報の多い文と，項が省略されたインプット情報の少ない文のどちらの方が格助詞の学習に有効なのかについて調査した。また，母語学習の子どもを対象に，格助詞学習に有効なインプット情報がどれほどの出現率で出現すればその効果を発揮するのかについても調査した。

第 1 章では，文を理解する際に格標識が重要な役割を果たすことと，そのような格標識の学習を説明している仮説として意味的ブートストラッピング仮説を提示した。また，本研究で対象とする，第二言語として日本語を学習する子どもが抱える言語学習の問題について説明した。

第 2 章では，先行研究について概観した。まず，格標識の特徴について述べ，母語児の各標識学習過程と方略に関する研究についてまとめた。次に，言語学習におけるインプット情報の量，およびインプット情報の出現頻度が言語学習に及ぼす影響について調査した先行研究について考察した。さらに，日本語を第二言語とする子どもの格助詞の学習に関する研究を概観し，本研究の課題を述べた。

第 3 章では，母語学習について以下の実験を行った。まず，格助詞あり文，なし文を刺激と

して，母語児が格助詞をどの程度学習しているかを，年齢を追って実験的に検討した (実験 1)。次に，母語児がどのように格助詞を学習しているのかについて，インプット情報の量の観点から検討した実験を実施した (実験 2)。さらに，実験 1，2 で明らかにした，有効なインプット量を含む文がどれほどの頻度で出現すれば格助詞の学習に効果的であるかについて検討した (実験 3)。その結果，母語児は 4 歳以上で主語標示の格助詞を，5 歳以上で目的語標示の格助詞を学習していることが明らかになった。また，助詞なし文の理解において，子どもは最初の名詞を必ずしも主語として理解していないことがわかった。さらに，インプット情報が少なく項が省略された文の方が格助詞学習に有効であること，有効なインプット情報を含む文が 100%出現せず，80%，さらには 20%の出現頻度であっても，格助詞の学習に有効な役割を果たしていることが明らかになった。

第 4 章では，実験 1，2 と同様の手法を用い，日本語を第二言語とする子どもの既存格助詞の学習について実験的に検討した (実験 4，5)。その結果，第二言語学習においても，インプット情報の少ない文の方が，格助詞の学習に有効であることが明らかになった。また，第二言語学習者の子どもは，助詞なし文の最初の名詞を主語として理解する傾向が強かった。

第 5 章では，第 3 章と 4 章の結果について，以下の 3 点に焦点を当てて総合考察を行い，第 6 章で本論文の結論を述べた。

1. インプット情報の少ない文が目的語標示の格助詞の学習に有効である。
2. 有効なインプット情報は，インプットに 100%出現しなくてもその有効性を発揮する。
3. 第二言語としての日本語を学習する子どもは，文の最初の名詞を主語として理解する傾向が強いが，母語学習の子どもはそのような傾向がない。

本論文の結果からは，日本語を母語，および第二言語とする子どもの目的語標示の格助詞の学習において，以下の点が明らかになった。①インプット情報の多い文はいつも有効とは限らず，学習対象の語の特徴などが有効なインプット情報の量に関係している，②子どもはインプット中の有効な情報を見極めて利用できる，そして，③対象の語の学習メカニズムは母語学習と第二言語学習で類似しているが，文の理解については異なるストラテジーが用いられる。

本論文はこれまで検討されてこなかった文法形態素の学習におけるインプット情報の役割について検討した先駆的な研究である。特に，英語の研究で重要視されてきたインプット情報量が日本語には当てはまらないことを証明した点，少ないインプット情報量でも学習が進むことを明らかにした点，母語学習者と第二言語学習者を対象とし，両者が異なるストラテジーを用いて格助詞を学習することを明らかにした点で学術的貢献度が高い。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年　10 月　3 日